

【第1部】CISRの発展と宗教社会学

CISRのヨーロッパにおける宗教社会学のアプローチ
ACSSSとCISRとを比較して
カレル・ドベラーレ



一九四八年、ルーヴァン・カトリック大学のジャック・ルクレール教授は、国際宗教社会学会 (La Conférence Internationale de Sociologie Religieuse, CISR/International Conference for the Sociology of Religion, ICSR) の設立に尽力した。CISRは宗教社会学会 (Association for Sociology of Religion, ASR) が五十周年を祝った今年 (一

九八九年)、創立四十年を迎える。そこでCISRの評議員会と会員に成り代わり、この喜ばしい機会に際して皆様に祝詞を述べることをお許し願いたい。ASRの多くの同僚がCISRの学会に寄与してこられたが、そうした協力は決して近年に留まるものではない。遡ること一九五一年、ブレダ (オランダ) で開催された国際宗教社

会学会第三回学術大会の活動は、ジョゼフ・フィヒター教授と彼の同僚である、C・J・ニュエス、E・K・フランシス、およびジョン・L・トーマスによって大会紀要にすでにまとめられた。このような相互の意見交換が、ヨーロッパやアメリカにおける宗教社会学の発展を確実に刺激したのである。

ルクレールは、一九四八年にベルギー、フランス、オランダから十五人の教授や研究者を招き、ベルギーのルーヴァン⁽¹⁾にあるルーヴァン・カトリック大学哲学研究所の客間で会合をもった。彼らは、各自国の大学における社会学の授業に関する情報を交換し、宗教社会学の研究手法について議論した。これらの学者は、意見交換のより頻繁な機会や同種の研究に従事する研究者とのより永続的な交流が必要であることを痛感し、それゆえ、一九四八年四月三日「国際宗教社会学会(CISR)」を設立したのである。規約が作成され、クレール・ルブレが初代の事務局長に就任した(一九四八年四月二、三日の議事録、ルクレール所蔵)。また一九四九年四月二十八、三十日ルーヴァンにて第二回学術大会を組織することも決議さ

れた。その団体名はその特定の目標を明確に表している。

「宗教的 sociology」(sociologie religieuse)

採用された名称は、形容詞で社会学の専門分野を特定するフランスの伝統(例えば、宗教的 sociology、犯罪社会学、農村社会学、都市社会学、家族社会学……)によって部分的に決定されたが、「宗教的 sociology」(sociologie religieuse)と「宗教の sociology」(sociologie de la religion)および「諸宗教の sociology」(sociologie des religions)とを区別する⁽²⁾とに努力が払われたのである(Labens, 一九六〇年、一七頁、Lebre, 一九五五年、二〇六頁)。学会員は「社会学」とは何かについて様々な見解を持っていたが、「宗教的 sociology」(sociologie religieuse)は明らかにカトリック教会に奉仕する社会学であった。

神学的 sociology が経験的 sociology か?

第三回学術大会(一九五一年)において、N・ド・ヴォルデ教授はこの問題を論じた。彼は、当時二つの解釈が一般に見られることを指摘した。一方では、宗教的社

会学は神学に基礎を置くべきであると主張する学者がおり、その例として彼は、N・モンゼルやアド・ゲック、アメリカのポール・H・ファーフエイらに言及している。他方では、宗教の経験的研究を強調する学者がいる。後者はさらに社会学の対象に応じて分類される。ある者はド・ヴォルデのように、宗教的 sociology の研究を、宗教生活の社会的諸形態(組織や宗教的秩序など)とこれら構造間の諸関係の経験的研究、およびこのような宗教的構造と世俗的集団(教区や社会階層など)との諸関係の分析に限定する。それに比べてG・ル・ブラのアプローチは明らかにより広範である。彼はド・ヴォルデとは異なり、儀礼や法、倫理といった宗教生活に関する客観的データの研究や宗教生活と人口統計、経済など世俗的現実との諸関係の研究を排除しなかった(De Volder, 一九五一年、二一八―一九頁、De Bras, 一九五一年、一八―一九頁、一九五五年、一〇―一三頁、一九五八年、四一―四四頁)。ル・ブラの立場はCISRにおいて有力であった。しかし、その社会学のアプローチは依然として宗教的に拘束されたままであった。すなわち、研究は教会に奉仕するために

存在するのみならず、それはカトリック教徒によって遂行されねばならない。その分析枠組は自己の超越的信仰に貢献すべきものであり、観察はその宗教的立場によって光を当てられねばならないとされたのである(Labens, 一九六〇年、一八―一九頁、Lebre, 一九五五年、二〇六頁)。

教会に奉仕する sociology

ルクレールは「宗教的 sociology は教会に奉仕せねばならない」、すなわち福音伝道に奉仕せねばならない、と繰り返した述べた(一九五五年^a、八頁)。第三回学術大会の開会の辞で、彼は次のように述べている。

今日、人々の心に多くの混乱が見られる。その状況、とりわけ宗教生活を正確に説明することは難しい。しかし、福音伝道の使命を持つ者は、行動する前にまずそれを知っておくべきであり、それゆえ正確な結論に到達しうる社会的観察方法の助けを借りて真の状況を考察すべきなのである。行動する前に知ること、これは学会の設立者たちに共通な関心事であった(「予備草

稿」一九五一年、二頁、Leclercq、一九五五年a、八頁。

当初から設立者たちは、方法論的に確かな宗教的社会学を促進するために科学的で非宗教的な組織でありたいと、きわめて明確に述べていた(規約第三条、および第四条)。しかしながら、一九五一年、ブレダ(オランダ)での第三回学術大会では、主催者の招待でKASRKI (Catholic Social-Ecclesiastical Institute, カトリック社会—教会研究所)も参加した。その聖職者たちは教会の司祭の仕事に専心してはいたが、いかなる社会学的素養も持ち合わせていなかった。これは学会にあからさまに宗教的色彩を帯びさせるものだが、KASRKI会長のケンラート氏はそれを制度化することを望んだ。その大会から数週間後、彼は常任委員会への手紙の中でCISIRに宗教的性格を明白に付与することを提案した。

ルクレールは五月十四日の手紙の中でそれに応答した。CISIRは宗教的社会学の専門家が互いに研究成果を比較し研究方法を改善するために、国際的に会合できるように設立されたという事実を彼は強く主張した。結果として、彼は組織の最初の目的を擁護することになった。

は方法論的質問によって結論に関する議論を中断させる。聖職者が結論を望むのに対して、科学者は自分の研究手段を改善したいのである。

ある出来事がこの点を極めて明瞭にしている。第四回学術大会の晩餐会での乾杯の際、ジェルリエ枢機卿とル・ブラ教授との間に礼儀正しくも断固とした対決が起こった。枢機卿はある部会に出席し、そこで価値ある社会学的な研究手段を作り上げることが困難であり、それゆえこの課題には必然的に時間がかかるであろうことを強調した。ル・ブラは、「それが実現されうるのは二〇〇〇年になるだろう……たぶん」と言った。ジェルリエ枢機卿は乾杯の音頭をとったとき、二〇〇〇年という年まで待つ余裕は誰にもないと述べた。ル・ブラはそれに対してこう言い返した。「教会には時間がないかもしれないが、学会は社会学者の仕事に関係しているのではありません」と(J・ヴェルシユール、「CISIRの歴史」、一九七四年の業務書類、ドベラーレ所蔵)。誰しも、学会で両者が呉越同舟し、その結果矛盾した要求が出されることを喜ばなかった。とり

社会宗教的研究の促進は量的ではなく、質的に行われねばならない(方法を確定する中心的組織を設立し、その重要性を確固たるものにする)。こうした見解は、設立者たちの精神においては非宗教的^{ノン・ドクシナリヤル}な方向を意味するものであった。CISIRは教会構造体、すなわちカトリック教会の一部たるべきではないのだ(ルクレールのケンラート宛の手紙、ド・ビー所蔵)。

しかしながら、一九五一年五月二十四日のCISIR常任委員会会合において、最初の規約は改正され、CISIRは宗教的になった。⁽²⁾一九五三年ラトゥレット(フランス)での第四回学術大会において、ル・ブラはCISIRが「司牧と信条にもとづく、すなわちカトリックの組織」ともなったことを言明した(一九五五年、九頁)。この新たな方向付けは多大な影響をもたらした。一九五一年以来ずっと、研究成果に関心を持つ聖職者と理論的方法論的議論により関心を持つ研究者の両者が学会に集うことになったのである。彼らの期待の相違は、総会で極めてはっきりと浮かび上がった。聖職者は科学的議論に関心を示さず、結論に対する質問でそれを中断させ、また科学者

わけ出席した聖職者たちは、方法論的理論的問題にかなり焦点が当てられたので、提出された結論に対する確信を失ってしまった。

もちろん、科学者たちは学術大会のプログラムを作成し続けた。彼らは研究成果を交換し、方法を議論した。しかしながら、彼らはまた、科学的研究とその原則に依存している教会の組織構造を改善することを望んでいた。例えば一九五六年ルーヴァンでの第四回学術大会において、彼らは教区組織について議論し、農村および都市の教区に最適な生態学的かつ人口統計学的条件などを實現するための基準を研究した(『紀要』V.CISR, 一九五八年)。その後の学会では、社会学理論と諸概念がプログラムの中心となることがより多くなった。ボローニャ(イタリア)での第六回学術大会では、「宗教と社会的統合」がテーマとなり、例えば教区と社会的統合、宗教と社会変動、カトリック少数派と社会的統合など宗教社会学における機能分析に寄与するテーマについて論じられた(『紀要』V.CISR, 一九六〇年)。ケーニッヒシュタイン(ドイツ)での第七回学術大会では、社会学者たちは、

当時まで行われていた単なる社会統計学的研究を統合するための準拠枠組を研究した。「教会への所属」(教会への入信)というテーマが会議の準拠枠組、政治参加や組合加入などに関する研究とほとんど異ならない準拠枠組となった。この時期はまさに、組織や制度などにおける「規範的統合」の社会学的研究が行われた時期であった。しかしながら、教会の問題は依然として学会のプログラムを作成する上で大きな役割を果たしていた。例えばモントリオール(一九六七年八月一日―四日)での第九回学術大会では、「教会における聖職者と社会」が全体テーマとなり、聖職者の自己イメージや不満に関する報告、すなわち、どのようにして聖職者を補充するか、神学校の学生の状況、神学校について、独身生活について、聖職者の経済的境遇や司牧上の地位について、また軍事指導司祭の位置についての報告があった。『紀要』に掲載された諸研究はきわめて排他主義的であり、すなわち単なる「宗教的社会学」にしか過ぎなかった。この特定の領域以外の研究に言及したのは全報告の四〇%だけであった(例えば、一般社会学や社会心理学、階層社会学、職業

社会学、あるいは組織および官僚制の社会学)。宗教的社会学固有の領域以外で引用された名前はわずか一ダースほどであり、そのうち二つ以上の報告で言及されたのはパーソンズとウェバーだけだった。『紀要』に掲載された主要参考文献でさえ、カトリック聖職者の社会宗教的研究に限定されていた(『紀要』IX: CISR, 一九六七年)。こうして「宗教的社会学」は自己中心的で排他主義的になってしまった。こうしたCISRの科学的方向付けに徹底的な変化が生じたのは、ローマでの第十回学術大会(一九六九年)からであった。この点については後述することにし、まずはCISRの第二の特徴を確認しておきたい。

国際的学会

当初、国際宗教社会学会は三カ国の代表によって設立された。一九五一年の第三回学術大会では、六カ国から六十六人が参加した。イタリア、ドイツ、そしてアメリカが最初の三カ国に加わったことになる。第四回学術大会では、オーストリア、カナダ、スペインの三カ国が加

盟で、一九五六年の第五回学術大会では、十八カ国から二百六十二人が参加した。これらの参加者の出自は、ヨーロッパや北アメリカおよび南アメリカであった。一九七〇年に新しい事務局長のジャック・ヴェルシュールは、学会報(Bulletin de Liaison 一九七〇年、第一号)に、学会加盟者として四十カ国三百六十六人が登録され、学会報を受け取ったが、会員の出身地はすべての大陸にわたり、とりわけヨーロッパ(西および東)と北アメリカが、それぞれ六〇%、二六%の割合を占めていると書いている。

会員が国際的であっただけでなく、学会に招来された報告も国際的広がり呈していた。第二回学術大会以来、国際的特徴が顕著になり、諸研究はベルギー、ドイツ、フランス、オランダ、そしてスペインから提出された(「報告の概要」、ド・ビー所蔵)。第三回学術大会においては、カナダ、チリ、コロンビア、ハンガリー、イタリア、アメリカ合衆国、そしてザイルが加盟した。その後の学会でこうした傾向は強まり、その結果学会の活動範囲は拡大された。CISRはまさに、その国際的野心に従って

活動したのである。これはもちろん、主として学会を各国持ち回りで行ったことによる。十一カ国で開催された最初の二十回の学会のうち、十三回がヨーロッパ共同体の設立国で、そのうち四回は学会が設立されたベルギーで開催され、また一度ヨーロッパの外で、すなわち一九六七年に第九回学術大会がカナダのモントリオールで開かれたことがある。

とすれば、CISRはその名称に表現されたプログラムに従って活動したと結論づけられるかもしれない。我々は、その活動の第二期において一九六九年以来急激な変化に気付くだろう。しかし、これらを議論する前に、私はCISRとカトリック教会、とりわけローマ教皇庁との緊密した関係を指摘しておきたい。

CISRとローマ

この問題はより徹底的な研究に値するが、私の利用できるちょっとした資料から二、三の点を示唆することができよう。プーラの研究(近刊)が、このCISRとローマとの間の緊張をより明確にするだろう。

一九四九年、ルクレール会長はローマにCISRの設立を告知した。「一般に理解されているように、仮説から出発し『社会学的科学』の方法を使ってなされうる、宗教の領域での社会的研究」に対して、ローマは特に警告を発した(Lectercq, 一九五八年、二五頁)。実際、ローマは実証主義とデュルケム学派に対してとりわけ警告を発していた。ルーヴァンでの第五回学術大会において、ルクレールは、『宗教的社会学』にとつて必要なのは事実の研究として特徴付けられるアメリカ型の社会学であつて、デュルケムのような「思弁社会学」ではない、と述べた。こうした彼の主張の要点はおよそ「数値にもとづいて言え」ということであり、これはほぼ同時期にソローキンが、彼の『社会学の流行と弱点』で計量社会学に対して社会学者に与えた警告でもある。しかしながら、ルクレールはまた単なる事実の研究の危険性も看破していた。社会的事実は諸原理の必要性を排除しない。だから、彼は統計学的傾向を規範的とみなす危険性に注意を促したのである。社会学者はただ信念と儀礼・慣行の社会的諸条件に洞察を与えうるに留まるのであつて、規範

を提供することはできないのである(一九五八年、二三一―二六頁、Lectercq, 一九五五年b、一六二―一六五頁)。ルクレールはまた「宗教的社会学は宗教的精神によつてのみ探求されるのであり、とりわけカトリック教会の社会学的研究は神学に精通したカトリック教徒によつてなされるべきである」ということを力説した。誤った解釈をせずに外側から宗教を研究することはできない、と彼は主張している(Lectercq, 一九五五年b、一六〇―一六一頁)。

CISRはこのような選択をし、かつ学会ごとに依頼して教皇庁および地方の司教から学会プログラムの承認を取り付け、『紀要』(Acts)創刊号を出版許可と検閲を受けて出版したにもかかわらず、教皇庁長官は一九五六年、ジャック・ルクレール会長とジャン・ラバン事務局長に、学会の「組織的構造」―例えば会長職や役員職―の常設は「時期尚早」であるという見解を教皇庁は持っている、と通告した(ルクレール所蔵)。明らかにヴァチカン、教会の組織的構造におけるCISRの立場を懸念したのである。ジャン・ラバンはローマの友人に宛て

た手紙の中で、CISRは「国際カトリック社会―宗教的研究団体」ではなく、社会宗教的研究の方法論を向上させ、司教のためになされた社会研究の価値と信憑性を改善する機関である、と長官に伝えてもらいたいと彼に依頼した。こうした理由から、CISRではサマースクールを組織することが望まれもした。当初よりCISRは国際的支部を組織する機関でもあったのである。オワイヤ(ルーヴァン・ラヌーヴ)所蔵資料がそれを証明している。すなわちベルギーにおいて、宗教社会学者は(ワロン人もフランダース人も相ともに)自ら組織して定期的に会い、研究成果を交換し方法を改善して国際的会合を準備したのである。

一九五九年、国際宗教社会学会第六回学術大会がポローニャで開催された。その際、ポローニャのレルカロ枢機卿や大司教が、それ以前の学会で行われたのと同じような後援をした。一九六二年のケーニッヒシュタイン(ドイツ)での第七回学術大会は、教会の後援なしで開催され、『紀要』も教会の出版許可なしで出版された。しかし、私の記憶によれば、その時の参加者にはカトリ

ック教徒が多く、たくさん司祭や宗教関係者の援助があり、各部会は教会関係の敷地内で行われた。一九六〇年代において、国際宗教社会学会の第二研究委員会―すなわち宗教社会学部会―の諸会合では、CISRは依然としてカトリックのレッテルを貼られており、これは単に東欧の社会学者たちだけによるものではなかった。

しかしながら、設立当初の学会以来報告書の中では、プロテスタンティズムの社会学的研究への言及がなされており、それは報告者の出身国にカトリシズム以外の諸宗教が存在するという事実に関連していることは、強調されてしかるべきである。ポローニャでの第六回学術大会では、CISR会長が公式にカトリック教徒以外の参加者を歓迎した。第七回学術大会では、カトリシズム以外の諸宗教の研究者の名前も、学会の公式プログラムに掲載された。

とはいふものの、修道会員F・ブルーアルは小集団を率いて、この学会の終わりに実行委員会に「カトリック以外の宗派の代表者へのこうした入会許可」に対して猛烈に抗議した。彼は、CISRの発端に忠実な別の国際

学会を設立するとさえ脅迫したのである（J・ヴェルシュール、「CISRの歴史」、一九八七年の未整理業務書類、ドベラーレ所蔵）。しかし、私がすでに指摘したように、CISRの明白なカトリック的特徴は一九五一年に規約の上で示されたに過ぎず、設立当時からそうであったわけではない。聖職者に関する第九回学術大会（一九六七年、モントリオール）の『紀要』で、初めて明らかに他の教会（英国教会、ルター派、および他のプロテスタント宗派）を扱った報告書が見られる。

概して「CISR（国際宗教社会学会）」は、宗教社会学のある特殊なタイプ、すなわち「宗教的社会学」を實踐した。このタイプの「社会学」は自己満足的で排他主義的であり、ほとんど一つの教会に奉仕し、その方法においてのみ「社会的」であるに過ぎなかった。⁽⁴⁾カトリック教会は、あからさまに宗教的社会学の業績を支配することを望んだが、CISRはその方法論的目標と教会に提供しうる奉仕とを強調することによってのみ、教皇庁から組織を守ることができたのである。こうしたCISRとローマとの間の緊張した関係にあって、会長や事

務局長はCISRの新たな規約を提案せざるをえなくなった。そこで彼らは、その承認を教皇庁に頼むことをCISR学会報（Bulletin、一九六〇年後期）で示唆した。学会員の多くはそれに猛烈に反対し、結局ローマへの接触はなされなかった。学者の新しい世代はCISRの目標に「自ら」限界を課すことを認めようとせず、社会学の主流やウェバーやデュルケムの社会学的伝統に再び結びつきたいと希求していたことは明らかである。急激な変化は一九六〇年代の終わりに起こった。

CISR、宗教社会学の国際学会へ

一九六八年、当時CISR事務局長であったエミール・パンは、CISRの学会報（一九六八年、第一号）で、新しい規約を提出したが、それは次号の学会報（一九六八年、第二号）によれば、満場一致で承認された。そこには「我々の国際学会の規約は、それに対する反対も表明されず、決定的に承認されたと見做すことができる」と記されている。

この規約はどこが新しいのか。CISRの目的は決し

て社会学方法論に限定されなかったが、宗教団体に關するほとんどすべての言及は削除された。削除されなかったのは、実行委員会の構成員には少なくともローマカトリック教徒二名と他のキリスト教徒二名が含まれていなければならないという条項と、宗教社会学に關心を持つ者は誰でも「加盟会員」になれるが、学会の現役正会員資格は「宗教の進歩に關心を持つ」社会学者に保留されているという条項、および「準備委員会」は各学術大会ごとに設置されるが、それまでの間に会員は発表レジュメを提出し、それ以外の者は事務局長に報告の許可を申請せねばならないという条項である。

第十回学術大会はローマで開催され（一九六九年）、『紀要』には「宗教的社会学」を批判した研究報告や宗教的社会学的研究における理論的方法論的問題に關する議論、セクト、無神論、無宗教の研究が掲載された。ほとんどすべての研究報告で、デュルケムとデュルケム学派を含んだ主流の社会学への言及が見られた。学会に出席していたブライアン・ウィルソンは、いくつかの報告で触れられており、また他の研究では、宗教社会学の中心

的諸問題を再構成し「教会社会学」を批判したバーガーとルックマンの近年の業績に言及された。この学会において、ヴェルシュールは新事務局長に就任し、一九八五年まで在職した。会長を務めたブライアン・ウィルソン（一九七一年―一九七五年）やデイヴィッド・マーティン（一九七五年―一九八三年）とともに、ヴェルシュールは学会で大きな影響力を持った。

ローマでのCISR総会では、「新しい規約と活動範圍に關して」宗教的言及はすべて廃棄されることが決議されたので、規約の改正が主要な問題となった。CISRが開放されたことを示すために、次の学術大会（一九七一年）はオパチア（ユーゴスラヴィア）で開催されることも決議された。この学会の全体テーマは「宗教と宗教性、産業・都市社会における無神論と無信仰」であった。この時の総会で新規約が承認された。最も重要な変更は第四条の条文に施された。CISRの目的は「純粹に科学的なもの」であるとされ、「加盟会員⁽⁵⁾」という身分が廃止された上に、「会員は宗教の進歩に關心を持つべきである」という条項、および「実行委員会の構成員には

少なくともローマカトリック教徒二名と他のキリスト教徒二名が含まれていなければならない」という条項が削除された。その結果、CIS Rはオバチアでその宗教にまつわる過去の最後の痕跡を拭い落とすことになったのである。

それ以来、CIS Rの目的にさほど変化はない。それは規約の第三条と第四条に明記されている。「CIS Rは科学的学会である。その目的は、宗教およびそれに関連する現象の分析と解釈を通して、社会学とその関連科学を発展させることにある。」その目的を達成するために、学会は次の二つの目標を優先させる。すなわち、「(a) 社会学者間の関係、より一般的には学会の目的に関連する様々な学問分野の専門家間の関係を、世界中で促進すること、(b) 定期的に国際学会を組織すること」である。定期的な学術大会は二年ごとに開催されるが、CIS Rはすでに地域学会（日本）を一度開催し、今一度（メキシコ）開催しようと計画している。より最近のルーヴァンでの規約改正（一九八五年）の目的は、単に学会の民主化を推し進めることであつた。

規約に基づいて、一九六八年以来「準備委員会」の会合を通して各学術大会の準備がなされうるよう提案された。ブライアン・ウィルソン会長が、一九七五年の会合の準備委員会を一九七四年オックスフォードで召集して、この規定を実行しようとしたのは一九七三年のことであつた。それ以来、CIS Rのすべての学術大会は、世界中の大学で教鞭を執る専門の社会学者たちによって準備されてきた。それゆえ、以下に挙げる教授たちの学会への影響力は非常に大きかった。ウィルソン、マーティン、ルックマン、セギー、レミ、イザンベール、ガノン、アクアヴィヴァ、ギッツアルデイ、ライエンデッカー、そしてドベラーレである。とりわけ最初の三人は、その存在と著述を通して、宗教社会学者の若い世代が学会の内実とイメージを変えるのを助けた。こうして、CIS Rは真の意味で宗教社会学の国際学会（International Association for the Sociology of Religion）となった。

結論—ACSSとCIS Rとを比較して

一方で、CIS Rとアメリカ・カトリック社会学会

(American Catholic Sociological Society, ACSS) とを比較しても、うまくいかない。というのは、そのアメリカの学会はCIS Rよりも活動範囲が広いからである。しかしながら、他方の両団体は一九七〇年代までに宗教社会学を促進する学会—宗教社会学会（ASR）および国際宗教社会学会（CIS R/ICSSR）⁽⁶⁾—となった。

私が指摘したように、大きな変化は一九六〇年代—とりわけ十年間の終わり—と一九七〇年代に起こつた。この時期は特別な時代であり、文化が激しく変容し、それはカトリック教徒に多大なる影響を与えた。この影響は、日曜日の集団礼拝の急激な低下にきわめてはっきりと顯れるようになった。カトリック教徒は深刻なアイデンティティ・クライシスに直面し、それは同様にカトリック社会学者にも衝撃を与えたのである。その上、カトリック社会学者の新しい世代は前世代を継承したもの、その大部分は社会学の大学院教育を受けた俗人であり、彼らの第一の準拠集団はもはや教会ではなかった。前世代—ルクレール、ド・ヴォルデ、ドゥカステラ、ヴェルシユール、ゴッダイン、パン、カリエなど—は聖職者であ

り、まず神学者であり哲学者であつた。新しい世代はカトリック制度の内外で社会学の訓練を受けており、彼らの主たる準拠集団は専門の社会学者によって構成されていた。それは彼らの会員構成において極めて明確になってきた。実際、CIS Rと国際社会学会（ISA）の宗教社会学研究委員会とに重複して入会することが、一般に見られた。キブリアニ、ギッツアルデイ、パス、イザンベール、メートル、ライエンデッカー、レミ、そしてドベラーレは、ウィルソン、モル、ベックフォード、ルックマン、バーカー、および他の社会学者たちとCIS RやISAで会合した。CIS Rの中心メンバーはISAの研究委員会の役員でもあつた（例えば、キブリアニとドベラーレ）。その結果、CIS Rの学会員にとってISAは、ACSSの学会員にとってアメリカ社会学会（ASA）が果たしたのと同じ役割を果たしたのである（Reg. 一九七〇年、一二七—一二八頁）。若い社会学者たちの多くはアメリカ合衆国の学会、例えばASRやSSSR（宗教科学学会）、ASAの集まりにも参加した。彼らは何よりもまず社会学者だったので！

ACSSに比較して、CISRには「カトリック社会学」を促進しようとする、極めて小さい少数派がいるに過ぎなかった。ACSSがそういう特徴をもつに至った時期（一九三八年―一九四〇年）からかなり経ってから、CISRは誕生した（Reiss, 一九七〇年、二二〇―二二頁）。CISRには、ポール・レイスが言うように一九四一年から一九四八年の間、ACSSが「神学や哲学、社会学や社会行動の混ぜ合わせ」といった特徴を示したような時期をもつこともなかった（一九七〇年、二二―二四頁）。そのような発展がなかったのは、部分的にはCISRに社会哲学者が所属していた結果である。彼らは、社会学の特別な寄与、つまり信仰と不信仰、教会行事と背教を促進する社会的特質の経験的研究を強く主張したのである。教会の政策は聖職位階組織の範囲内のものであった。それに対して社会学は、そこで「言葉が具体化されるべき」社会条件の変化について伝達できるだけであった。それゆえ、CISRは初めから宗教に関する社会学の特殊な旗印、すなわち「宗教的社会学」を育てたのである。それは理論的到達点を無視して、社会学の方法論的側面

の結果広範な国際的交流が生じたことである。カトリック社会学者は専門的な支援者を探し求めた。彼らは社会学者になるべく、様々な国際的研究会にも出席した。また彼らは他の学会からCISRに社会学者を連れてきた。その結果、CISRは教会に所属しているか否かを問わず、社会学者の国際的組織となり、宗教的背景の問題とはまったく無関係になったのである。こうして、CISRは社会と宗教における変動に関心を持つ社会学者の国際的組織になった。彼らの研究の第一目的は洞察と認識、理論構築であり、宗教団体への奉仕ではない。あるいはこう言ってよければ、CISRは宗教ではなく、科学に捧げられているのである。それゆえ長期にわたり、CISRは教会敷地内ではなく、むしろ大学において会合を開いてきたのである。

付記 私は、同僚のP・ド・ビー、J・ラバン、L・ヴォワイエ、そしてB・ウィルソンに感謝の意を表したい。彼らは、私がCISRの公文書を作成するのを助け、貴重な示唆を与えてくれ、CISRの発展についての洞察を分かち合ってくれた。

を重視し、はつきりと教会へ奉仕を行っていた。それは、自己中心的で排他主義的な社会学であった。

CISRの変化はまた、その社会学的視点の拡大によっても説明されるかもしれない。「宗教的社会学」は、レイスによれば（一九七〇年、二二六―二七頁）ACSSと同様に、六〇年代以来ずっと「カトリシズムの社会学」になってしまった。社会学者は教会生活だけではなく、カトリック教徒の生活をも研究し始めた。例えばオランダとベルギーでは、「信仰支柱化」(pillarization)の社会学が発展した。宗教社会学者と政治社会学者は、カトリック教会組織の発生と発展およびその変容や、これらの国々の政治的均衡への影響力について研究し始めたのである（ユイス、ビュイエ、チュンク、チューリンク、ドベラーレ、ヴォワイエ、他数名）。後者の展開はカトリシズムにおける大きな変化の原因ではなく、むしろ結果である。

CISRを完全に変え、ACSSをも変えたと私には思われる決定的変化とは、カトリシズムにおいてアイデンティティ・クライシスが生じた結果起こった、カトリック社会学者の行動基準の転換であり、その大きな変容

註

(1) ルーヴァンのカトリック大学に社会学の講座を設置したのも、著名な道徳哲学者で修道会員のルクレールであった。これが、六〇年代初頭にベルギーの二つのカトリック大学（ルーヴァン・ラヌーヴとルーヴァン）で開設された社会学部の起りとなった。

(2) 第二条「その目的は、宗教的社会学の研究に専心するカトリック教徒たちの間に協力関係を打ち立て、それによって、とりわけ実証的認識の方法に力点を置きながら、最も広い意味で宗教現象の社会的側面に係わるすべてを理解することにある。」

(3) しかしながら、次のことは注記すべきである。すなわち、第六回学術大会では、先の学会以来「カトリシズムの社会学」の概括が提示されたが（Reiss, 一九六〇年、七五―八六頁）、第八回および第九回学術大会ではO・シュレーダーとK・ドベラーレが、「諸宗教の社会学」の分野で出版された著作と論文を批評したのである（Schreuder, 一九六六年、二〇五―三五頁、およびK.Dobelaere, 一九六八年、三三―九六頁）。遅悪く、学会の「プログラムを総合する役割」を果たす、この「喜ばしい慣習」(Steeman, 一九六五年、三三―三頁)は、後に中止された。学会ごとに、その専門領域で増え続ける文献を分析するよう誰かに促すことは、困難だったのではないかと私は思う。シュレーダーは年間二六五の

出版物を分析し(一九六二年―一九六四年)、ドベラー

いは、第九回学術大会に先立つ期間で年間三七〇の出版物にすでに直面した(一九六五年―一九六六年)。

- (4) 現在ですら、ベルギーの教会に属する幾人かの高位聖職者は、社会学を単にデータ収集の方法と見做し、社会学を社会統計学に還元する。彼らにとってデータの解釈は、神学的背景を持つ神学者か哲学者に委ねられるべきものである。

- (5) 何年もの間、社会学者は、関連諸科学(例えば、人類学、歴史学、心理学)に属する社会学者や知識人がCISRに入会したり、学会に参加したりすることを経験し、そうすることによって聖職者を排除しようとする努力がなされた。が、実際、議論における後者の影響力は、否定的にはあれ評価されるようになった。「加盟」会員という身分を導入し、後にこの身分を廃止したことは、ちょうど葛藤を物語っている。

- (6) 宗教社会学を促進する二大学会がカトリック系の学会から生まれたことは、およそ不思議なことである。相対するプロテスタントはどうしたのであるか。教会の最高議会との関係はどうだったのだろうか。

参考文献

CISRの年次報告と年次総文を刊行したため。

- II CISR : "Résumé des communications" (Leuven, 1949)
Stencil, Fund de Bie.

1975).

- XIV CISR : *Religious, Secular and Social Class Symbolism* (Strasbourg, 1977).

- XV CISR : *Religion and Politics* (Venice, 1979).

- XVI CISR : *Religion, Values, and Daily Life* (Lausanne, 1981)

- XVII CISR : *Religion and the Public Domain* (London, 1983).

- XVIII CISR : *Religion and Modernity: Survival or Revival* (Leuven/Louvain-la-Neuve, 1985).

- IX CISR : *Secularization and Religion : The Persisting Tension* (Tübingen, 1987).

年次報告

- De Volder, N.1951. "L'Objet de la sociologie religieuse." *Acts III CISR*: 216-20.

- Dobbelare, K.1968: "Trend report of the state of the sociology of religion: 1965-1966." *Social Compass* 15: 329-65.

- Labbens, J.1960. *La Sociologie Religieuse*. Paris: Fayard.
Leclercq, J.1955a: "La Conférence Internationale de Sociologie Religieuse." *Acts IV CISR*: 7-8.

- . 1955 b. "Sociologie religieuse et théologie." *Acts IV CISR*: 159-67.

- . 1958. "Les grandes étapes." *Acts V CISR*: 18-29.
Le Bras, G. 1951: "Presentation." *Acts III CISR*: 13-21.

- III CISR : "Milieux modernes et vie religieuse" (Breda, 1951). *Lumen Vitae* (1951), nrs. 1-2.

- IV CISR : *Sociologie religieuse, sciences sociales* (La Tourette, 1953). Paris, Les éditions ouvrières, Économie et humanisme, 1955.

- V CISR : *Vocation de la sociologie religieuse, Sociologie des vocations and Paroisses urbaines, paroisses rurales* (Leuven, 1956). Tournai, Casterman, 1958, two volumes.

- VI CISR "Religion and social integration"(Bologna, 1959)
· *Social Compass* 7 (1960), nrs.1-3.

- VII CISR : *L'appartenance religieuse* (Königstein, 1962)
Bruxelles, Ed. du CÉP, 1965.

- VIII CISR "Religion in the transition from a pre-technical to an industrial and urban society" (*Barcelona*, 1965)
· *Social Compass* 13 (1966) nrs. 1,3,4,5.

CISRの年次報告と年次総文を刊行したため。

- IX CISR : *Clergy in Church and Society* (Montreal, 1967)

- X CISR : *Types, Dimensions and Measures of Religiosity* (Rome, 1969).

- XI CISR : *Religion and Religiosity, Atheism and Nonbelief in Industrial and Urban Society* (Opatta, 1971)

- XII CISR : *The Contemporary Melanophysis of Religion?* (The Hague, 1973).

- XIII CISR : *Religion and Social Change* (Lloret de Mar,

- . 1955. "De Louvain à la Tourette." *Acts IV CISR*: 9-15.

- . 1958. "Les étapes futures." *Acts V CISR*: 41-44.

- Lebrat, L.-J. 1955. "Sociologie religieuse et économie humaine." *Acts IV CISR*: 203-35.

- "Note préliminaire." 1951. *Acts III CISR*: 10-11.

- Pin, E.1960. "La sociologie du catholicisme depuis la conférence internationale (Louvain 1956)." *Acts VI CISR* : 75-86.

- Poulat, Emile. forth. "History and evolution of the CISR 1948-1988." *Social Compass* 37.

- Reiss, P.J. 1970. "Science and religion in the evolution of a sociological association." *Sociological Analysis* 30:119-30.

- Schneider, O. 1966. "Sociologie religieuse et recherche socio-ecclesiastique au cours de la période 1962-64." *Social Compass* 13: 205-35.

- Steeman, T.M.1965. "VIII International Conference of Religious Sociology." Barcelona, July 2-4 1965." *Social Compass* 12:323-25.

(ローマ・セント・ピエール大学宗教社会学会年報)
年次報告と年次総文を刊行したため。